

罰則

- 指導4ではなく、指導3で「反則負け」となる。
- 3回目の「指導」が与えられた時点で「反則負け」となる。
- 審判の作法や審判への理解を明確にするため、過去に柔道衣の握り方で罰則が与えられていたピストルグリップ、ポケットグリップなどの組み手について、今後は罰則を与えない

組み方

- 標準的でない組み方の場合、直ちに攻撃しなければ「指導」が与えられる。
- ベアハグ（投げるために相手に抱きつく行為）を行う場合は、攻撃する選手が少なくとも片方の組み手を持っていなければならない。組手のない状態において両手で相手に抱き着く行為には「指導」が与えられる。柔道衣に触れただけでは組んでいるとはみなさない。しっかり柔道衣を握っていること。
- 相手の袖の中に指を入れる行為は、今まで通り罰則を与える。
- 攻撃をしようとしないう、防御姿勢など柔道精神に反する消極的な行為に対しては厳しく「指導」が与えられる。
- 投技を準備するのに時間がかかることもあるため、組んでから攻撃を掛けるまでの時間を45秒に延長し、それまでに技がない場合は「指導」を与える。
- 脚を掴む行為や下穿きを握る行為については、1回目は「指導」が与えられ、2回目は「反則負け」が与えられる。



安全性

- IJF では、可能な限り柔道による外傷事例を抑えるため、安全性に関する規定を精査してきた。受が、背中から着地するのを避けるために行う試みについて、頭や首、脊椎を危険にさらす行為があれば、「反則負け」が与えられる。
選手が「一本」を避けるために故意にブリッジの体勢になった場合、主審は今までのように「一本」を宣告するのではなく、ブリッジの体勢で着地した選手に対して「反則負け」を与える。



ただし、これにより敗退した選手は、その後に試合（敗者復活戦や3位決定戦）があれば出場することができる。

- 柔道精神に反するような行為は直ちに罰せられる。
- 若い柔道家に悪い例を見せないように、両肘が着地した場合には技の効力を認め「技あり」を与えることができる。片肘で着地した場合には、技の効力を認めず、スコアとしての評価をおこなわない。



投技と返し技

- 取の攻撃に対して受が返し技を施した場合、自身の体が先に着地した選手が投げられたこととする。
- スコアを与えるに値する場合、適切なスコアが与えられる。
- 両選手が同時に着地した場合は、双方にスコアを与えない。
- 着地した後に選手が施した技（返し技）については、スコアの対象とはしない。
- 着地後のいかなる行為も寝技とみなす。

